

文樂叢書



繪本太功記
尼ヶ崎の段

2

床解考
人形の
型證說本

樂愛好會編集



大正十四年十月 御靈文樂座

武智光秀
武智十次郎

吉田文三
吉田玉松（四代目吉田玉造）



右 初代吉田榮三の武智光秀
左 現在の吉田玉助の武智光秀



太功記十段目尼ヶ崎に就て

竹本攝津大掾藝談

此の淨瑠璃は豊竹麓太夫が書卸したもので、未だに麓場と申して一の語り口を残した人なので御座います。此の人は實に名音で殊に張りがある立派な聲であつた爲に眞ギン（ギンで受ける）處を聲が宜過ぎて派手になる爲め、少しニデラして語つたのが、此の人の語り口なので御座います。

（補 後年清七や團平の如き八ヶ間し屋が出て、色々崩れた節を訂正補修したが、此の麓場斗りは一撥も手を下し得なかつたとの事である。全く藝道に生れ付いた人であつたと思ふ。其の風格が、今日迄存續せられて麓場と云つて八ヶ間敷いのである。元來この段は剛壯憤懣の氣で充滿した光秀で、聴衆が泣くやうに書いたものである事を能く會得し

×攝津大掾は五代目春太夫の門弟、はじめ越路太夫。明治卅六年五月攝津大掾受領披露興行。三代大隅と共に明治期の二大傑。大正六年十月、八十才歿。

×麓太夫は大阪船場の人、鍋屋宗左衛門錦名を「鍋宗大盡」といふ。義太夫葬での大天狗の元祖。其の癖名前は鞍馬山下の麓太夫という。聲重、腹力とも剛強で一人も敵するものがなかつた。初代駒太夫の門弟寶曆七年初舞台。豊竹座退轉後、北堀江座に出る。文政五年五月歿、年九十三。

×初代鶴澤清七は三味線の朱章を初めて工夫した人、後三世鶴澤友治郎となり文化八九年頃までつとめる。三代鶴澤清七は三世長門太夫の三味線を廿六年間弾いた但馬の鬼勝。

×名人豊澤團平は文政十一年生、廿八才長門太夫に見出され、

て其の他は光秀を泣かざるを得ざるやうに仕向ける。責め道具に配せられた人形斗りであることを忘れずに語ると云ふのが太夫の一番大事の仕事である（其日庵）

其處で始めの「残る苔の花一つ、^x水上けかねし風情にて」の十次郎は優にやさしいと云ふ心持で謳つて居りますが、「立聞く涙轉^xび出で」から十次郎と初菊の二人の間は兎に角初菊は女ですから色氣を持つは宜しいのですが、十次郎は餘りに色氣を持ち過ぎては不可なので御座いますと申すは之は男の事でもあり、未だ正式の祝言をして居らない中で御座いますから此處がホンの工合もので、其の人物を映す映さないは其處の呼吸にあるので御座いますから、藝は段々奥を探る丈に六ヶ敷くなるので御座います。夫から「爰に哀れを吹送る風が持て來る攻め太鼓……何れもさらば……行方知れずなりにけり」迄の間を險しく語る人も御座いますが、私が前から聞いた昔の名人上手の語り口を聞きますのに、此の場は他の注進物と違つて險しくは這入り悪い處なので婆や母、又祝言

明治六年文樂座の櫓下、十七年文樂を去つて稻荷彦六座に移る。明治卅一年四月稻荷座で大隅の志渡寺を彈いて舞台で倒れる。七十二才、

×一輪の白牡丹がぐつたりと萎んでいる氣で

×ギンのニジツタ音で運ぶ、

「漸う涙押しめ」は涙を胸に堪える氣で語り、ト／＼く／＼ジャンとみるまで息を詰めて「ジャン」で息を取つて「母様にも祖母さまにも」と腹の底から涙で云う。

×コロビ、イイ、イーイデ、と足をつける心で運ぶ、「ワツと斗りに泣き出せば」のスエテは大事に「ナアキーイ、イイ、イイ」ツトン「イダセーエ、エーバ」と産字を一つも間違わぬよう語る、これ等の息遣いと、産字の間と足取と音遣いとギンの音の癖と一つも引字をせずに運ぶのが麓場

した斗りの花嫁を残して討死に行くので御座いますから、どんな氣強い者でも少しは後に心が残るのは人情の常なので御座います。又一「コレく神サン、風呂の湯が湧きました」云々の久吉の出は普通の旅僧では御座いせんから、此處は品格を持たして一寸狂言の詞見た様な氣取りで行きたいので御座います。夫から「爰に刈取る眞柴垣」の光秀の出は三味線の呼吸にあるので悪くすると「現はれ出でたる武智光秀」を一目に立て（否、耳）大きく怒鳴る者もありますが、此處は怒鳴る場所ではないので唯々武智光秀が大きく立派に聞える様に語れば宜しいので御座います。夫れから或る人の説によりますと老婆の詞の中に「系圖正しき我が家を逆賊非道の名を穢す」云々の非道のはにに改めてはどうかとの御注意も御座いましたがどうも故人の御書きになつたものを我々淺學な者が勝手に一字一句でも改める事が出来ないで其の儘に非道のと語つて居りますが、これはの、でもに、でも意味に替りはなからうかと考へられます。夫れにの、をに、に致しますと老婆の詞としてはに、の方が強くな

の心掛。

「二世も三世も」は「ニセモ
オーオラオーヲ」チン「サ
ンゼーモ」チヨン「メヨ
オトジャアト」
「討死とは」「ウチーイ」チ
チンとよび出すのはよくない、「ウチージニイトオワ
アア」となるべくきらずに
語ること

×こゝで團平の恐ろしい大ノリ
のタ、キが雷のようにひびいて表の木戸番が道具が倒れたと早合點して、勘定場へとび込んで來たと云う話がある

るかも知れませんが、これは如何なもので御座いませう。又「主君を討つて高名顔、天子將軍になつたとて」が不敬になるとのお説も御座いましたので大阪の或る警察の署長さんに伺ひましたら、これは「熊谷陣屋」の「敵と目差すは安徳天皇」云々の熊谷の詞とは丸で意味が違ふから構はない」との事で其の儘やつて居ります。併し「武王は殷の紂王を討ち、北條義時は帝を流し奉る」は不敬の詞で御座いますから、此處は「帝を遷し奉る」と改めて語つて居るので御座います。夫れから此の淨るりは「主を殺した天罰の報いは親にも此の通り」云々の前後がヤマなので御座いますが、前受け専門の人は「これ見給へ光秀殿」の相模の口説きを聞かせ所にして居りますが此處は婆の悔みを受けて直ぐ替つて口説きになると云ふ迄の處で、此處は前にも申した麓太夫のは最も聲に位のあつた人で御座いますから丸味を持つてボーとフツクリと語つたさうですが、どうも此處を聞かさうとすると角立つて不可ません。

(補) 元來始めに云ふ通り、光秀で聴衆が泣くやうに書いてあるので

×「ひつそぎ槍」チチン「主を殺した天罪の……」の一句は何故老母の沈鬱にあんな譜がついているかと云えば、この一段の主眼が光秀の主殺しを深刻に戒めた文章で、丁度こゝでその主眼の文字に觸れざるを得なくなつた作者の意志を調節者がとつて朱章に下したから老女の繰言中にこんな派手な手をつけた。演者は老女の繰言の主旨を前々から連絡の切れぬように腹にもつて「主を……」と語ることを忘れてはならぬ、それを忘れると老女の言分やら何やら分らず、聴衆の手を叩く爲となる事になる。

×「詞ノリ」詞ノリの口説は節にて語れ、謳いはするなと云う教えがある。

「オーイーサメモヲシタソノトキニ」と素直に下らぬように詞ノリに語る。則ち咄しのように云うて秘にあり事にな

老女が死を以て訓戒し、妻が口説き立てて諫め、悍が死を以て父の非行を嘆いて死し、可憐な嫁が手負に取付いて泣立てるので、「流石勇氣の光秀も親の慈悲心、子故の闇、輪廻の絆にしめ付けられ、こたへかねてハラ／＼／＼」と到頭泣くのであるから、此までの仕込みが藝で此の如く四方八方悲慘の情合で責め付けられる時は、光秀でなくそれ以上の大悪人でも、其の本然の性善に返つて泣くは最も至極であると思ふやうに語る事が此の尼ヶ崎を語る大主意である。故に「流石。勇氣の。光秀も。親の慈悲心」とネバツたら息を詰めて、親を思ひ、「子故の闇」と語つたら息を詰めて、子を思ひ「輪廻の絆に締め付けられ」と太「ヘタリ」に息で「ヘタリ」して情合を聴衆に納得させて、後「こたへかねて」と語らねば、「ハラ／＼／＼」ど大落しは語られぬのである。皆大落しでなく小落しである。否亂脈落しである。光秀の泣く落しブシになつて居るのは一つも聞かぬのである。（其日庵）

これは淨るり以外のお話ですが、若竹若太夫から二代目美太夫となり、

らねばならぬ、紋の方は一切太夫に構わず、極つた譜の通りに弾きさえすれば夫でチャシと藝になる。
「オーイーサア、モヲシタ、ソハトキニ」と紋について語ると謳うことになる。

×
コタヘカネテハアラハラハラ
アメカナミダノオ
シホザカア、ア、ア、ア、ア
、ア、ア、、イイ、
ナミタチサ、ワア、ア、

目 次

太功記十段目に就て	1~6
床 本	7~43
カシラノ説明	44
舞台背景圖	45
刊行書目	46
太功記メモ	47

文 樂 愛 好 會 同 人

高 安 六 郎	
齋 藤 清 二 郎	
荻 野 三 治	
安 原 仙 三	
吉 永 孝 雄	
三 村 幸 一	
石 井 常 彦	
大 西 重 孝	
近 石 泰 秋	

文 實・吉 永 孝 雄
表紙カット・齋 藤 清 二 郎

後に播磨小掾となつた人は賞められると藝に隙があつて不可ないと云つて弟子達に小言を言つたさうですが、今の太夫は賞められたいくと云ふ感念で語つて居るので困ります。

ア、ア、グウー、ゴトク
ナア、リイ、オ、

本文

經 厄ヶ崎の片邊り、主君を討つた我子の不義に憤りをもつ光秀の母、望月の隠居所。軒端に夕顔棚、正面いつものところ、暖簾を懸けた納戸口、その右手佛間、上手の屋体は湯殿につゞく。下手一杯に敷疊、庭先には上手寄りに長床几一ツ、その前に夕顔の鉢植下手に井戸の造り物。

×夕顔棚。機場。

一南無妙法蓮華經を題目太鼓に合せて數名の太夫が舞臺の陰から聞かせておいて「御法の聲も」から始る。

二皇月（かしら髪々、髪白の切髪）羽子地切りつぎの着付遊團扇を持つて出て妙見講の終りしばかりの近所の百姓（ツメ人形）四人に茶の接待をする。

×兵庫縣、今は、大阪市に近く工業地帯、大阪灣に臨む。なまめかし尼とかける。どこやらつやのある尼。美しい尼。×軒端。こゝは源氏物語夕顔よりとる。×招かれて妙見講のふるまいをうけ

×かみがた一京、大阪
×身分家柄の高い人
×明智光秀

詞×一 南無妙法蓮華經くくく。地フシ御法の声も

なまめ二× 媚きし尼が崎の片邊り。誰が住む家といふ顔も。

おのが儘なる軒のつま。あたり近所の百姓ども。

茶碗片手に。高咄。詞なう婆様。こな様も見た

ところ。上方で歴々のお衆さうなが。何の爲

に面白うもない此在所へはござつたぞいの。ア

アコレく甚作そりや言やんな。京の町は武智

×織田信長

×しも、大阪より西、中國、四國、九州をさすしも宮島へも身をしきり（冥途の飛脚）

×妙見さんを信仰する日蓮宗の講社、講中のものがあつまつて妙見菩薩をまつり祈る集り

×たぐりかける、つきつきと言ひまくる

といふ悪人が。春長様を殺して大騒動。太かた
又下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて来て。
武智と是非に一合戦なけりや済まぬわいのう。
そんなら年寄はうかく、京の町には居られぬ兎
角危げのない様にこんな在所へ来てゐるが大出
来く。時に近付きがてら妙見講を勤めるとは
よい手廻し。大きな馳走に逢ひました。これか
ら随分お互にお心安う致しませう。地サアく往
なうと口々に。いひたい事をたくしかけ、フシ喋

三 講中を送つて戸外に出、夕
顔に水をやり、床几に腰打か
け團扇を使ひ乍ら夕顔の花を
眺め楽しむ

× 母々、その度毎に、一人一人
に

× 腰室に美しく咲く花即ち妻、
花から次の初菊をひき出す

四 操（かしら老けをやま、疊
油付片はづし）淺黄えどとき
の着付に同じ打掛、角かくし
を冠り突袖の姿で初菊を伴つ
て下手から出る。初菊（かし
ら娘、疊油付十能花櫛）緋緞
子刺繍の振袖に同じ打掛。

× ぐり戸

五 皇月の姿を見とめて、慇懃
に前に進んで辭儀、初菊もこ
れに倣ふ。

× もと京都六角四條坊門油小路
西洞院の間にあつた法華宗の
寺院、光秀の時焼け、今は寺
地通の御池下る所

り廻つて帰りける。^{地三}老母はつどく門送り ^{小オクリ}

庭の千草に打つ水も ^{ハズミ} たもつ葉毎に。風かを

る。軒を目当てに。来る人は武智が[×]閨に咲く花

の操の前は家來を遠ざけ、^四嫁の初菊伴うて窺ふ

切戸の庭先に^{フシ}。花に心を。養ふ老女。^{地五}それと見

るより手をつかへ。^詞後室様の見舞として。只

今参上致せしと。^地慇懃に相述ぶる。詞に老女は

打笑み。^詞チ、珍らしい嫁女孫嫁。遙々の道よう

こそく。さりながら悻光秀。当月二日本能寺[×]

六 畢月、忌々しげに顔をそむける。

× 田舎

× おろか、馬鹿らしい、ですぞ
こしやくもの。失禮千萬

× 「婦人に三従の道あり…未だ嫁せざる時は父に従ひ既に嫁しては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ」(儀禮)

七 浮世を捨てた氣樂さを、軒端の夕顔を見上げる様子に見せ—。

にて。主君を害せし無法者^六。同じ館^{やかた}に膝並ぶるも。先祖の恥辱身の穢れと。地館^{ちかん}を捨てて此在所[×]へ身退きし此婆を。詞見舞^詞とはおこがましい。善にもせよ惡にもせよ。×夫に付くが女の道。操の前は武智十兵衛光秀が妻。そなたは又孫の十次郎光義が嫁でないか。生死^{せうじ}わからぬ戦場へ。地赴^{ちしゆ}く夫を打捨てて浮世を捨てた姑に。孝行盡すは道が違ふ。詞妻城^詞に留まつて。留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦^{やもめ}暮しの樂しみには。夕顔^七棚の下

×弓矢は武士のたしなみ…参照
せまじきものは宮仕、
八、正面に身体をそむけて、老
の一徹さを捨てない。

×吞氣、氣樂

×こゝではお手傳ひ、奉公、よ
くお仕へをしませう

九 操は初菊を促して下手の井
戸端で水仕事を始める。(皐
月は屋体へ戻る) 振袖姿の初
菊が投げ釣瓶を扱ひかねるの
で、操が代つて巧みに汲上げ
て見せ、互ひに顔を見合つて
微笑む。この二人の動作が一
日重苦しくならうとした此場
の空氣を解さほぐす。「水汲
み上げんと立寄れば」一杯に
二人は屋体へ入る。操は腰紐
を解き角かくしを脱ぐ。

×花香、情愛、花香、澁々は茶
の縁語

×澄む以下井戸の縁語、にごつ
た井戸の水が果して澄むか。
どんな結果になるか心配で。
つるべに奇縁のつる(蔓すぢ
系統、血縁)をかける

涼み。捨^地つべきものは弓矢ぞと。いひ放^ハしたる
老女の一徹。跡^{フシ}は詞もなかりけり。常^地の氣質^{きしつ}
と逆^詞らはず。いかさま後室様の仰やる通り。此
様に只お一人でござつたら。何もかも氣散[×]じで。
マア第一はお身の養生。今^地から私も初菊も後室
様のお傍に居て。飯^まも焚いたり茶も沸し。お宮[×]
仕へをせうぞいのと。有^九合ふ前垂れ打掛の上に
引締め茶釜の傍。端^{ハナガ}香の籠る姑の。しぶく機
嫌を取兼ねる娘心に初菊も。マどう済[×]む事か濁[×]

×それでございます。では申しあげます。
はい。母、操の言葉

一〇 皐月は涙の顔を團扇に隠くして――。

り井の。深[×]き奇縁の釣瓶繩。フシ[×]水汲み上げんと立寄れば。詞コレく嫁達。シテ孫十次郎は。城に残つて居めさるか[×]さればでござります。十次郎が願ひには。どうぞけふの軍に。高名^{かうめう}手柄が顯はしたいと。父上迄は願ひしかど。婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし。母に取次してくれと。くれぐの願ひ故。地余り健氣^{けんけ}さ祖母様に御機嫌の程いかゞぞと。伺ひに参りましたと語る内。老母は涙をはらくと流し。詞ヲ、煩^う。

×十次郎と云ふ立派な武士

一一 團扇を下におき數珠を出して合掌。

×數珠の珠は百八箇、百八煩惱

一二 久吉(かしら檢非違使)襖
黄木綿の頭巾を冠り、白の着
付に墨染の衣を纏つた旅僧姿
風呂敷包を背負ひ、坊主笠を
手に、何者かに追はれる心で
題目太鼓に送られて下手横幕
から駈出るが「西行もどき
の」で氣を換へて、門口に進
む。

×古池や蛙飛び込む水の音(芭蕉)

道の邊に清水流るゝ柳かげし
ばしとてこそ立ちとまりつれ
(西行)

×西行のやうな坊さん、西行と
でも言ひたいやうな行脚の僧

さの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の邪非道よこしまの

軍の評定。聞くが厭さの此住居。が又孫を誉め

るではなけれども。非道な悻光秀が子に。十次[×]

郎といふ武士が。生れて來るとは是も因縁悔ん

で返らず。戦場の事聞きたうない。アいやく^二

情なの浮世やと。無量の思ひ百八の。数珠瓜^{つま}

繰つて居たりける。折節表^{ふし}へ草鞋かけ。風呂

敷背に息せき蛙飛込^{せな いつき}。道の邊の清水。掬^{むす}ばん

夏の旅。西行もどきの僧一人。門口に立ち休^九

×愚み、厚志。大變言ひにくい
事ですがこの僧の爲一夜の宿
を借して下さい、一夜の宿の
御厚意をうけたい

×遠慮なく、お氣づかひなく

一三 入口に腰かけて草鞋を脱
ぐ操と初菊は何くれと世話を
やく。

×操と初菊

×呑氣なこと、氣輕なこと

×新などを入れておく納屋

らひ。^詞諸國修業の一人旅。近頃申し兼ねたれど

御宿の報謝に預りたし。^地押付けながらといひ入

れる声を老母が聞取つて。^詞見苦しうござります

れど。[×]お心置きなう御一宿。それは千萬忝ない。

左様ならば御遠慮なしに御免。^地御免とあがり口

腰打ちかくれば[×]二人の女。草鞋の^{フシ}紐を解き

かくれば^詞ア、勿体ない^く。構うて下さりま

すな。旅しつけた坊主の氣散じ。[×]木納屋^{なや}の隅で

もついこり。蚊帳も蒲團もいりませぬ。お心

一四 光秀（かしら文七疊揉上

げ髪油付纏み立て）紺金の
てつぼり、同じ大口に草摺
白金のちはや、簪をきて竹
の子笠で面を隠して下手敷
疊から忍び出で、屋体を窺
ふ。皐月と思はず禪線が合
ふので、元の敷疊へ身を潜
める。皐月狼狽の態を僧に
見られまいと團扇で顔を隠
す。

×にも似合はず。私らしくもな
い。おや、これはしたり
「お、こちらの人としたこと
が」（關取干兩幟）

×ほう、火の燃える形容

×流水で身をきよめることから
浴すること風呂に這入つてね
て下さい

×正客の相手となつて御馳走に
なる、いたゞく、あとから這
入らせてもらひませう。

一五 久吉左に風呂敷包を持ち
軽く思入れあつて、上手屋
体へ入る。

遣ひ御無用と。^地詞半へ表口。^{一四}人目を忍び只一騎。

窺ひ立聞く武智光秀。心得がたき旅僧と。生垣

押分け差覗き。思はず見合す母の顔。老母は何

か心に点頭^{うなづ}き。^詞チ、わし[×]とした事が心の付かぬ。

コレ御出家様。此板囲ひが則ち風呂場。水は幸

ひ汲んであり。つい[×]ばやぐと燃して。暑い時

分ぢや行水して休んで下さりませ。婆も跡で[×]相

伴しませう。ア、イヤそれには及びませねど。相

伴とあれば沸しませう。^{一五}そんなら御免なされま

一六 軍卒（ツメ人形）わらびの着付、茶のんだらの輕衫下手から出る。

一七 同じくツメの軍卒二人、櫓の柄で鎧櫃を擔つて出る。
すぐ後から十次郎（かしら若男、蠟油付前髪、煎茶笠）白癡斗目の着付、織物の袴、突袖の姿で出る。

一八 屋体に入り、曇月に向つて辭儀。
×動作の禮儀正しく

一九 左に太刀を取上げ、下げ緒をさばいておいて初菊に預け、後へ退つて忝しく辭儀、操もともに手をつく。

せと。地包み提げ氣散じに。フシ湯殿をさして入り

にける。地一六味方の軍卒両手をつき。詞御子息十次

郎みつよし光義様。後室様に御願ひの筋ありと。只今は

へ御越しと。地いふ間程なく靜々と。一七家來に持た

せし鎧櫃。フシ昇入れさせて打通り。詞コリヤく

者ども其方達に用事はない。陣所へ早くと追つ

立てやり。地一八威儀を正して両手をつき。詞母様を

以て御願ひ申せし出陣。御聞届け下されなば。

地一九武士の本意と十次郎思ひ。フシ込んでぞ願ひけ

×どうしてもかうしても、何と
しても、どうあつても是非と
も、

二〇 皷月、手にした團扇で初
菊を指差し「何と嫁女嬉し
いか」と云ふので、初菊は
恥しさに袖で顔を掩ふ。

二一 初菊いそくと進み「色
も媚めく」十次郎の姿に見
とれ、人々の手前を憚つて
身を退きなほ悦びに浸る態
×心の中が顔にあらはれること
顔色にそれと見えること

×夏の葉の赤い楓、恥づかしさ
うれしさにほうつとして赤く
なること秋の楓のつよい紅葉
とちがつて美しいなまめかし
い赤をさす

る。地 老母は見るより機嫌顔。詞ヲ、珍らしい十

次郎。出陣の願ひとな。忤を見限り此所へ。身

退きしに叮嚀を願ひの筋。最前嫁女に詳しう聞

きました。×とても出陣しやるなら。二〇 祖母が願ひ

はこの初菊。今宵この家で祝言の。盃してから

門出しや。何と嫁女嬉しいか。地 と老の詞に初菊

は。二一 飛立つばかり氣もいそく。心の悦び穗に×

出づる。顔は上氣の夏楓色も媚めくばかりな×
かへで なま

り。地色 只默然と十次郎。今日初陣に討死と。覚

二三 十次郎は正面となり秘か

に憂ひの表情。

×御存知なされぬ、せは敬稱の助動詞。

二三 操も暈月の前に手をついて。

×早くしたいであらう

×酒のこと、三々九度のことで酒のこと。

二四 祝言の用意のために次の間に退く。

×夫が出陣するときにつける鎧の世話をするのは妻の役目。

×三國は日本と支那と印度、三國にも比べるものもない深い悲しみ、

×「三國一ぢや、婿になりすまいたシャンく」と云ふ小唄が祝言の席でよく言はれた。又三國一の富士の山ともつゞける。それを轉用。

二五 初菊やがて来る大きな悲しさも知らずソツと十次郎に太刀を渡し、暈月の手をとつて次の間へ入る。十次郎立上つて二人の去つた跡を見送る。「奥の……」オクリで太夫替り。十次郎は一旦納戸へ入るのが慣例。

悟極めし此体。御^三暇乞ひに参りしと。知らせ給

はぬ悲しやと。本^三フシ涙。吞込み忍び泣き。地色^三操の

前も立上り。祖母様の御機嫌の変らぬうちに固

めの盃。詞^三ヲ、それ。孫も大かた心^三ぜき操は九献

の用意しや。二^四十次郎が初陣の。鎧^三の役はすぐに

花嫁。地^三三國一の悲しみと。二^五知らぬ白齒^三の孫嫁

が。手を引連れて。三人はオクリ奥の

×昔は結婚しない前は白歯で結婚するとおはぐろをした、しらぬしら齒は頭置法

○切場

二六 十次郎、腰刀を分けて出で上手寄りに坐り、左肩にもたせかけた太刀に兩手を重ねて、物思ひにふける風情
×あとに残る書の花一輪で美しい青年十次郎のこと

×花が水を吸ひ上げずにしほれること、初菊と夫婦的肉体的契りが討死と覺悟してある十次郎には出来ないことをさす
水揚は遊女の初床。

×「父の恩は山よりも高く、須彌山も尙低し、母の恩徳は海よりも深く滄溟海も又淺し」
(童子教)

二七 後へ退つて平伏。

二八 右膝を一つ進めて、次の間をジツと見やり「孝と戀との」で正面となり、扇を膝につき兩手を重ねて、首垂れる。

一間へ入りにけり。^{二六}地 残る蒼の花一つ。[×]水上げか

ねし風情^{ふぜい}にて思案。投首^{なげくびしほ}萎るゝばかり。フシ漸う。

涙押止め。^詞母様にも祖母^{ばば}様にも。これ今生^{こんじやう}の暇^{いとま}

乞^こひ。此身の願ひ叶うたれば。思ひ置く事更に

なし。^地十八年が其間御恩は海山[×]かへがたし。討

死するは武士^{もののふ}の習ひと思召し分けられて。^{二七}さき

立つ不孝は赦^{ゆる}して給べ。^詞二つには又初菊殿。ま

だ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ。わしが事

は思ひ切り。他家へ縁付きして下され。^地討死と^{二八}

×深い感慨無量の思ひにたとへる。海を隔てるから、へだてる一間とかける。
二九 初菊、次の間で立聞きをしてゐた心で走り出で、十次郎の傍に泣伏す。
三〇 十次郎驚いて、初菊の右袖をとつてその口を押へ。
三一 初菊兩の指先を揃へて見て、艶にクリズーと思ふてゐるに、右手左手をつかつて慕ひ寄る振り、とゞ膝に鉤る。
「餘り聞えぬ光義様」片手遣ひで十次郎を見込むネジ。
討死とは「下手の體櫃に取付き」一曲がないイ、
「右袖を口に當て、足拍子を踏みながら十次郎の方へ進むので、十次郎は扇で下を打つてたしなめる。」
×夫婦は二世を更につよめて三世と愛情の深さを示した
×少々譯のわからぬ、理窟にあはぬ。大變冷淡で薄情だと恨むところ
×きよくは面白みで、愛想がない、情けない。「あら曲もなや、よしなき人を持ち申して」
「（鉢の木）」
×どうあつても死なさせはしない。「わしやなんぼうでも得きらぬ」（新版歌祭文）

聞くならばさこそ歎かん不便やと。孝と恋との
思ひの海隔つ一間に初菊が。立聞く涙轉び出で。
スエテ わつとばかりに。泣出せば。はつと驚き口
に手を当て。詞ア、コレく声が高い初菊殿。扱
は様子を。アイ。残らず聞いて居りました。夫
の討死遊ばすを妻が知らいで何とせう。二世も
三世も女夫ぢやと思つてゐるに情ない盃せぬが
仕合せとは。餘り聞えぬ光義様。祝言さへも済
まぬ内討死とは曲がない。わしや何ぼうでも殺

三二 扇子を下についてキツと云放つ。初菊は「エー」と驚き倒れる。

×失策、しくじり、不名譽

三三 十次郎、邊りを傳り乍ら立上ると、どちらからともなく寄り添つて來て「どう急がるゝもの……」で氣がついて二人は切ない心を抱いて左右に分れる。

×もののぐ、鎧、武具。

三四 十次郎、物着のためマキ足でゆつたりと納戸へ。初菊は鎧櫃を重たげに運ぶ。

×若武者のつける赤糸で結通した鎧

しはせぬ。思ひ止つて給はれと縋り歎けば。詞ア

アコレ此方こなたも武士の娘ぢやないか。十次郎が討

死は豫ての覚悟。祖母様ははに泣顔見せ。もし悟ら

れたら未來永々縁切るぞや。エ、サアとかう

いふ内時刻が延びる。其鎧櫃よろひびつこゝへ。く。ア

イ。アイ。サ早う。時延びる程不覚×の元。聞分

けないと呵しかられて。い三三といし夫が討死の。首途かどで

の物具×付けるのがどう急がるゝものぞいのと。

夕、キ三四泣くく取出す緋緘×ひおとしの、鎧の袖に降りかゝ

三五 皐月は茶綴子の打掛を着

て十器を載せた三寶、操は長柄の銚子を持つて出る。

×婚禮の時に長柄の銚子につける紙で折った雌蝶、雄蝶

×親と子と小手をかける

×胴、籠手、袖、脇指、腰櫛、腰當

×鍔の小札、鍔又は革でつくった板で魚鱗の如く並べておとして鍔をつくる、縁を立ちきるにかける

三六 十次郎、緋織の鍔、鍔形打った兜を冠り、顎紐を結び乍らマキ足で現れ一爽かなりし其骨格で立見得(ツケ)。床几にかゝる。初菊後よりついて出る。

×みくびは、かぶとを仰向けてきること

×かぶとの正面に角のやうに二本鍔えてあるもので、くわの形をしてゐる

三七 操の酌で祝言の盃が取交はされる。最後に初菊は盃を持つまゝ、これが別れの盃か、でホロリとなる。

×男まじき有様、男まじしと云ふは男まじの慣用

×よめごれう、よめ御、花嫁標よめの敬稱

る。三五
雨か涙の母親は。白木に土器白髪かはらけしらの婆。

長地
長柄の銚子蝶花形首途かどでを祝ふ熨斗昆布のし。オクリ結

ぶは。親と小手すねあて臙当×。六具固むる三々九度。此

世の縁や割小札×やりこざね 三六ぬ×。猪首×くはがたに著なす鍬形×の。あたり

眩ゆき出立は。爽かなりし。其骨柄詞 三七。チチ適あつぱ

れ武者振り勇ましし。高名手柄を見る様な。祝

言と出陣を一所の盃。サアく早う。目出たい

く嫁御寮と。悦地ぶ程猶いや増す名残。こんな

殿御を持ちながら。これが別れの盃かと。悲し

三八 十次郎の右腕にすがり三

度引いて切ない心を訴へるの
で、十次郎は思はずシツカと
引寄せた。「胸は八千代の一
で氣を兼ねて初菊を突放し軍
扇（黒地に朱の丸）をサツと
開いて顔を掩つて泣上げる。
初菊は下手に分れて可憐な後
姿を見せて泣伏す。

×戦争に勝つて自分の本陣に歸
ること

×莊子に「上古に大椿樹あり、
八千歳を以て春となし、八千
歳を以て秋となす」どあり、
幾千代かけてとの願ひもむな
しく。支那ではめでたい長壽
の木であるが日本では椿は武
家では首がおちると云つて忌
む。

×かぶとにづけてあごで結ぶ
紐。忍び泣くにかげ涙をしほ
ると忍びの緒をしめるもかけ
る。

三九 突然遠寄せ。十次郎、框
から右足を踏出して右手を耳
にかざして聞く（ツケ）

四〇 立上り皇月と操とに「禮
し庭に飛下る。引止める初
菊の力が勝つたのか、タ
と下に居るが（同時に早打込

三八 さ隠す笑ひ顔隨分お手柄高名して。せめて今宵

は凱陣をと。跡は得いはず喰ひしばる。胸は八

千代の玉椿散りて。はかなき。フシ心根を。地色 察し

やつたる十次郎包む涙の忍びの緒[×]フシしぼり。か

ねたるばかりなり。フシ^{三九}哀れを。こゝに吹送る。

風が持てくる攻太鼓。氣を取直し突立ち上り。^{四〇}

いづれもさらばといひ捨てて。地 思ひ切つたる鎧

の袖。ハズミ^{フシ}行方知らずなりにけり。地 ナウ悲し

やと泣入る初菊。母も操も顔見合せ。詞 ばゞ様嫁

みの鳴物)すぐ立直つて一散に戦場へ駆出す(打込みの鳴物とツケ)初菊後を追はうとして泣く。

四一 皐月、胸を抱いて悶へ乍らトーン、トーン、トーンと正面になり泣伏す。「聞く初菊も」で初菊は檻の前に走り寄り老母と手を取交し、顔を見合せて泣く。

×物を覺えず知らぬ標子、我を忘れて思はずみれんな所を見せて泣くにかける

女。可愛いやあつたら武士を。むざ／＼殺しにやりました。ナウ初菊。十次郎が討死の出陣とは知りながら。なま中止めて主殺しの憂き死耻を曝さうより。健氣な討死させん爲。地祝言によそへて盃をさしたのは。暇乞ひやら二つには心残りのないやうと。思ひ余つた三々九度。ばゞが心のせつなさを推量しやとばかりにて。始めて明かす老母四一の節義。聞く初菊も母親も一度にどうど。伏しまるび。フシ前後。×不覺に泣き叫

四二 久吉、上手の屋体から何
氣なく出る（初菊はこの間に
屋体に戻る）

×後室様、はゞ様。奥さん。

×沸したての風呂はきついから
老人の体にはこたへる。

×先に這入ることを遠慮してゐ
ると、湯がさめて水になつて
しまふ。

四三 輕く思入れあつて上手へ
去る。

四四 皐月は何か決意するところ
あるものの如く上手の屋体
へ、操と初菊とは次の間へ入
る。

×「秋風に不破の關屋のあれま
くも、惜しからぬまで月ぞも
りくる」（信實）

かたびさは片ながれの庇で、
粗末な家の庇のすきまからも
れる月光。刈取る柴と眞柴久
吉を討取る意をかける。

四五 屋体が上手へ引かれる。

ぶ。地色 四二 襖押明け何氣なうつかく出づる以前の

旅僧。詞 コレく×かみ様。風呂の湯が沸きまし

た。どなたぞおはひりなされませと。地 いふに此

方は泣顔隠し。詞 チ、それは御苦勞ながら。年寄

に新湯は毒。跡は若い女子ども。マアお先へ御

出家から。いかさま湯の辭儀は水とやら。左様

ならば御遠慮なし。お先へ参ると地 立上れば。三

人は涙押包み。本フシ 奥の佛間と湯殿口入るや。月

漏る片庇。四五 爰にかり取る眞柴垣。夕顔棚の此方

蛙の聲。屍体の後から以前の光秀忍び出て「武智光秀」一杯に笠をかざした大見得（ツケ）。本釣り。笠を捨て簀を脱ぎ、船底に降りると、（屍体元の位置へ戻る）シャシャレヤン……シャシャヤン……と大ノリの鼓、左手をふりかぶり斜に屍体を見込んだネジ（ツケ）。「この内に」左手で指差し「聞竟一」左膝を大きく打ち「只一討ち」屍体を見込んで油断のない標、振返つて竹影に目をつけ、一本の竹を選んで槍を造る。本釣り。屍体へ上つて忍び足で進む。×絶好のチャンス、この上なきよき機會。

×心が緊張することと張弓とかけ、その縁で矢竹、やたけからやぶがきと頭韻でつゞける。×外がこひを隔ててその上に見える竹「見越しの柳」（一代男）と最上の武器と見當をつけた竹とをかける。

×誰ぞ庭へ来たさうな……今迄鳴いた蛙がひつしやりと鳴き止んだ（槍の權三重帷子）
四六 頷いて湯殿へ槍を突込む（ツケ）襷先を切殘して手負ひを引出す。頭から冠つた衣

より。顯はれ出でたる武智光秀。^{ひつぎやう} 必定久吉此内に忍び居ること究竟一。^{×イっきやう} 只一討ちと氣は張弓。[×] 心は矢竹藪垣の。見越しの竹を引つそぎ鎧。小田の蛙の啼く音をば止めて敵に悟られじと。差足拔足。^{フシ} 窺ひ寄り。^{四六} 聞ゆる物音心得たりと突込む手練の鎧先に。わつと玉ぎる女の泣声。合点行かずと引出す手負ひ。眞柴にあらで眞實の。母のさつきが七轉八倒。[×] 詞ヤアこは母人かし。[×] なしたり。^地 残念至極とばかりにて。さすがの武

を取拂つて差添へを振冠つて、
斬りつけようとする、目指
す久吉ではなくて母である。
驚き乍、なほ納戸に久吉の
姿を求めてから「茫然たる」
一杯に立身の極り（ツケ）
×たまきえる（魂消える）でび
つくりすることたまげるとも
云ふ。急に恐怖におそはれて
魂の消入ること、こゝでは悲
痛な斷末魔の叫び「心たまき
りや夜さどくなつて」（博多
小女郎波枕）
×苦しさのたうちまはる。
×しまった、とんでもない事を
する。
×おどろいて、あつけにとられ
る、ほんやりと、自失するこ
と。
四七 操と初菊とが次の間から
走り出で皐月に取付く。光秀
は下手で床几にかけた形とな
る。
四八 皐月は二人を押退けて―
×右大臣が正しい。
×逆賊非道の行爲で以て家の名
譽をけがす
×「不義にして富み且つ貴きは
我に於て浮べる雲の如し」
（論語）大空に浮く雲のごとく
何時消えるかわからぬさだめ

智も仰天し、^{フシ}たゞ茫然たるばかりなり。^{地色} 声^{四七}
聞付けて駈け出る操、初菊諸共走り出で。ナウ母
様か情ない。此有様は何事と縋り歎けば目を見
開き。^詞 歎くまい歎くまい。^{四八} 内大臣春長といふ。
主君を害せし武智が一類。かく成果つるは理の
当然。系凶正しき我が家を。逆賊[×]非道の名を穢
す。不孝者とも悪人とも。譬へがたなき人非
人。[×] 不義の富貴^{ふうき}は浮べる雲。^地 主君を討つて高名
顔。天子將軍になつたとて。野末の小家の非人

なくはかないこと。

×もつそうめし二三合の飯を盛る器、もつそうめしを食ふと云ふ時には臭い飯をくふことで厭につながらることであるがこゝでは僅かの量をさす。

×きりまいは奴の二合半、もと扶持米を春、夏、冬と別け二月、五月は借米、十月は切米と云つた「二石二斗は何程ちや、昔興作が草履取、馬取の切米」(丹波兵作)

四九 太夫の息一杯にトンと下手斜となり左膝を立てかけて左手をかさす。その手を右に引いて「天罰の」左斜に空を見上げる。

五〇 機、庭先に降り涙にくれ乍らクドキとなる。「首途にくれ」も「光秀を見込んだ片手遣ひのネジの形で筋にのつて頭をつかひ」斯うした歎きは「老母の姿を見るに堪へない心。竹槍を拾つて」「現在母御を手にかけてエエ、エエ、」立つて見、居て見(足拍子)そのまゝ兩手に持った槍を見下して足拍子を踏み、槍を投げ捨て、泣き上るげる。「せめて母御の御最期に」

にも。劣りしとは知らざるか。主に背かず親に

仕へ。仁義忠孝の道さへ立たば。物相飯の切米^{×もつそうめし}

も。百萬石に。フシ優るぞや。地おのれが心只一つ

で驗^{しるし}は目前これを見よ。武士の命を断つ。刃も

多いに此様な。引つそぎ竹の猪突鎧^{しゅつき}。主を殺し^{四九}

た天罰の報いは親にも此通りと。鎧の穂先に

手をかけて抉^{えぐ}り苦しむ氣丈の手負。妻は涙に咽^{五〇}

せ返り。詞コレ見給へ光秀殿。地軍の首途^{かどで}にくれ

くもお諫め申した其時に。思ひ止つて給はら

光秀の前に來て手を合し「一筋にイ、……」で一心に改心を迫る（足拍子）。「恨み泣き」の後の合の手「チンくチンく……チチチンくチンチン……」でオロオロとなり乍ら足拍子を入れとど下手に來て泣き紙を咬へて悲しさを堪へる。

×光秀の妻の操と貞操とをかける。

五一 光秀、飽くまで傲然たる様で――。

×ちよさい、なまいき、りり

×つまりぬ話はやめよ。

×祖父、父、自分と主君の恩澤をうけてゐること。

「光秀暫く信長が旗下に屬しあるといへども、三代相恩の主と申すにてもなく」(繪本太閤記)

ば斯うした歎きはあるまいに。知らぬ事とはい

ひながら現在母御を手にかけて。殺すといふは

何事ぞ。せめて母御の御最期に善心に立帰る

と。たつた一言聞かして給へ。拜むわいのと手

あは
を合し諫めつ泣いつ一筋に夫を思ふ恨み泣き。

操[×]の鏡曇りなき涙に。フシ
誠あらはせり。地色
光秀^{五一}

は声あらゝげ。詞ヤア猪口才な諫言だて。無益の

舌の根動かすな。遺恨を重ねる尾田春長。勿論。

三代相恩の主君でなく。我が諫めを用ひずして

×人物、うで、才能、體量、等の容貌でない。

五二 ゆつたりと大きく、コジリ

×周の武王が殷の紂王が過を改めないで伐ち滅して天子となつた（十八史略）

×承久の亂で義時は後鳥羽上皇を隠岐に土御門上皇を阿波に順徳上皇を佐渡に流した。

五三 大きく兩手を膝について見得（ツケ）

×すざりをらう すつこんで居よ。

五四 操、夫の手に組ると光秀はこれを突放して軍扇を開いて前に構へた形、操はトントンと後へよろけて右手で止めた形で同時に極る（ツケ）。

五五 再び遠寄せが聞える。光秀一東立ちとなり左手を榻居にかけて下手を見やる。初菊は庭に降りる。

×陣鉦と陣太鼓ドン、ヂャン、五六 十次郎（かしらアオチ、ネムリの源太、露唐毛のさばき）額に血を擦ませ、右腕の疵を白布で結へ、折れ矢を背負ひ太刀を力によろめき乍ら

神社佛閣を破却し。惡逆日々に増長すれば。武門

のならひ天下の爲。討取つたるは我が器量。武

王は殷の紂王を討つ。北條義時は帝を流し奉

る。和漢俱に無道の君を弑するは。民を安むる

英傑の志。女童の知る事ならず。退り居らうと

光秀が。一心変ぜぬ勇氣の眼色。取付く。島

もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓。耳をつら

ぬく金鼓の響あはやと見やる表口。数ヶ所の手

疵に血は滝津瀬。刀を杖に踰ばひく。立帰つ

、駈戻つて倒れる。操、初菊はこれに取組む。

×今まさに死なんとする間際

×初菊

×申し申しこれく

×如才なしと泣くをかけるいろくくと介抱し乍らも泣くばかり

五七 光秀二人を引離し十次郎

の耳に口を寄せて。「様子はいかに」から待合せ。この間遠寄せをかすめて聞かす。

腰の印籠から薬を含ませ活を入れて「具に驅れ」と重扇で背を打つ(ツ)。十次郎氣をとり戻し太刀に纏つて手疵の苦痛を堪えるのと光秀が左膝に重扇をついて右膝にのしかゝるのと同時の極り(ツケ)。

×未練なり、腰拔者よ、弱虫め

×尼ヶ崎の海岸

五八「親人の指圖に」以下ノリ詞、氣負つた心で掌に唾をつけ、攻め寄せぬ敵軍を待つ態。「一白浪の」で上手に向いて右手を振り乍らトン、トン、トンと足拍子を入れる人形獨特の型、ト、ト、ト、とその

たる武智が一子。庭先に大息つぎ。詞 親人これに

おはするやと。地 いふも苦しき断末魔。見るに驚

く母親より。娘は傍に走寄りなう痛はしや十次

郎様。ばゞ様といひお前迄この有様は情ない。

お心慥かに持つて給べやいのくと取付いて。

スエテ 介抱如才。泣くばかり。五七 光秀わざと声荒ら

げ。詞 ヤア不覚なり十次郎。仔細は何と。様子

はいかに。具に語れと呼ばはれば。地 はつと心を

取直し。五八 詞 親人の指圖に任せ手勢すぐつて三千余

まゝ下手向きとなり「櫓を押切つて」で左に逆に持つた太刀で櫓を押す振り、よろめき乍ら立上り「縦横無盡に」でツバツケ六法、「敵は敗亡」左手に太刀を受けてトシと詰寄り「狼狽へ騒ぐを」で前にのめり「追つたて」右膝をついて太刀を擔ぎ左手を突出して極り(ツケ)、立上りチリガンで太刀を右に拂つて足柏子、ツルガンで上手に身をかはして足柏子、足元に斬込まれた心で右足を上げてトツツロツンロと右から廻つて来る「後の方より」で仰向けに倒れると光秀がこれ而起してやるので後向けに立上り後に太刀をついて右手をかざし(ツケ)「眞柴筑前守」となる。正面に戻つて崩れ「太刀抜きかざし」で太刀を振りかざすがすぐ落し、立上つて「只一騎立歸つて候」と後へ退らうとしてへたると初菊が取付くので、これを突放し、太刀を中について息をつぐ。×こそあるなれ……さあ來れ、×はいまう。買けること、敗北。破られて困ること。×せんど。行く先の目的地。最

騎。× 浜手の方に陣所をかため。今や帰國と相待つ所に。× 敵はそれとも白浪の。櫓を押切つて陸地に漕付け。追ひく都へ馳せ上る。眞柴の軍勢× ござんなれと。× 関をつくつて味方の軍兵縦横無盡になぎ立つれば。不意を打たれて敵は敗亡。× 狼狽へ騒ぐを追立て。追詰め。こゝを先途と戦ふ内。× 後の方より大音上。眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清これにあり。逆賊武智が小童ども目に物見せてくれんずと。いふより早く太

も大切な場。

×こわつば―こせがれ、

×くれんとす。ぐれようぞ。や
らうぞ。

×四方八方、すべての方面、
「四角八方に走り廻り」(太平
記)

五九 光秀思はず立上つて同ふ
を見込んで無念の形相(ツ
ケ)。

×明智光秀第一の勇將四王天但
馬守。尼ヶ崎伏勢の大將で秀
吉を寺院に追ひ込み探して居
る中に加藤清正にあひ討死す
る。

×さん候。そればでございます

六〇 十次郎、父の傍に逼ひ寄
り、手に縋つて―。光秀は下
手に座を移す。

刀抜きかざし。四角八面[×]に切立てられ。瞬く間
に味方の軍卒。残らず討死仕り。無念ながらも
只一騎立帰つて候と、^{フシ}息継ぎ。あへず物語れ
ば。^地光秀怒りの髪逆立ち。^詞ヤア云ひがひなき^{五九}
味方の奴ばら。シテ四王[×]天田島の頭は。さん候[×]
四王天は。目ざすは久吉一人と。昨朝よりの一
騎がけ。乱軍なれば生死の程も。慥かにそれと
承はらず。^{六〇}親人の御身の上心にかゝり候故。未
練にも敵を切抜け。是迄落延び帰りしぞや。此

×せきとめかね。たまらず。

×せがれ。こゝでは光秀。

所に御座あつては危ふしく。一時も早く本國へ、引取り給へサ早く。くくと地深手を屈せず爺親てを。氣遣ふ孫の孝行心。聞くに老母はせき×かねてアレあれを聞きや嫁女。詞其身の手疵は苦にもせず。極惡人の忤×めを。大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀。子は不便にないか。可愛いとは思はぬかやい。おのれが心只一つで。地いとし可愛いけなひの初孫を忠と義心に健氣けなひなる。討死でもさす事か。逆賊無道の名を穢し。殺すは何の因果ぞ

×塞き苦しむ。胸の塞がる。せき上げ来る苦しい聲にかゝる

六一 十次郎視力が利かなくなつた心で、「父上母様」と下手へ呼びかけ「初菊殿」と初菊の傍に居るのも知らず上手の操へ呼びかけ「名残惜しや」手探りで母親の髪に觸れて初菊でないことを知り、今度は下手へいざり行き初菊の髪に觸れてそれと悟り、「愛着の道に引かるゝ」で引寄せて頬ずりをしてからシツカと抱く。

×いもせ。夫婦。

×あいぢやく。かはゆいと思ひ込むこと。愛情に執着する。

六二 操思はず十次郎の方に向直り――。

×とせぐり苦しき老の身の。声聞き付けて十次

郎。詞ヤアそんなら祖母様には。御生害遊ばした

か。今生のお暇乞。今一度お顔が見たけれど。

六一 もう目が見えぬ父上母様初菊殿。地名残惜しやと

手を取つて、妹背の別れ愛著の道に引かるゝい

ぢらしさ。母は涙に正体なく。討死するも武士

の習ひといへど情ない。十八年の春秋を刃の中

に人と成り。いつ樂しみの隙もなう弓矢の道に

日をゆだね。今朝の首途の其時にも母様今日の

×につこり、につこと

六三 身をそむけて、袖口を咬へて悲しさを堪へる。

六四 初菊、返へらぬことを繰返して悔む時に用ふる三つざし。

×後朝。打解けて逢ふ夜もなく後朝もなく夫婦枕を交はず間もなく許嫁も名ばかりで永遠の死別となる。後朝は夫婦の語らひをした男女が翌朝自分の着物をきることに

×夫婦は二世、(父子は一世、主従は三世)

六五 十次郎へ縋りつき、その身体を何度も揺り動かして死出の道連れとならんことを迫る。「名残り涙の」で双方から手を取って名残を惜しむ。

初陣にあつぱ通れ。高名手柄して。父上や祖母様ははに誉

めらるゝのが樂しみと地につと笑うた其顔がわし

やまほろし幻まほろしにちらついて得忘れぬと口説くわいき立て。口説

き立つれば初菊も。ほんに思へば此身程はかな

い者が世にあらうか。六四とけて逢ふ夜のきぬく

も永き名残の許嫁。×二世を結ぶの枕さへ。かは

す間もなう此様な。悲しい別れをする事はマどう

した罪か情ない。わたしも一所に殺してたべ死に

たいわいなと身を悶え。互に手に手を取りかは

六六 十次郎の手をとつて父親の膝に取付かせ、自分も下手から同じく組む。操は居体へ戻り、老母の介抱をする。

六七 光秀、こゝで初めて手負ひの老母を見返り、そして十次郎と初菊とを抱擁めて「浪立ち騒ぐ如くなり」の大落し一杯に大きく動揺する。十次郎、初菊は居体へ。

×衆生は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上と六道を輪轉して廻ること。恩愛にほだされ、煩惱の業苦をうけること。重なり重なる恩愛の情にせめられ。

×涙を潮水にたとへ潮の分れ目の大浪立つにかける。

六八 遠寄せが聞える。光秀氣を取直して立上り「アノ物音は敵か味方か」と下手を見やり「すね木の松が枝踏みしめく」と兩手を突出して湧き起る勇氣を十分見せて兩足を踏みしめ（足拍子）、止つて下手の松を大きく見返る。「よち登り」から待合せ。居体を上手へ引くと下手に廻り物の松の太木が出る。木登りといふメリヤスに大小をから

し名残り涙の暇乞。見るに目もくれ心消え母も

老母も声を上げわつとばかりに取乱せば。さす

が勇氣の光秀も親の慈悲心子ゆえの闇。輪廻の

繼に締めつけられ堪へかねてはらくく雨か

涙の。汐境。浪立ち。騒ぐ如くなり。又も聞

ゆる人馬の物音。矢叫びの声喧く。手に取

る。如く聞ゆれば。光秀聞くより突立ち

上り。アノ物音は敵か味方か。勝利如何にと庭

先の。すね木の松が枝踏みしめくよち登り。

まぜて豪快な團七走り（激しくツケ）となり、木に登ると「眼下の村手をきつと見下し」となり、ツケ入りの見得き戰場で矢合せの時にあげるべきの聲
 ×ねぢけ曲がつた松と光秀の世にすねた意地張りをかける。
 ×ゆんで。月をもつ手。左の方×陣立を縦にして中央に主力をおいた備へ
 ×せんなりひさご。秀吉の馬じるし。戦ひに勝つことにひょうたんを一つづ増したと云ふ。
 ×様子を知つて逃げる。それと感づいて逃げる「只今討手に向かふ所、風を喰うて甘牌め……」（國姓爺後日合戦）
 六九 木から飛降り「いで一握ぎ」とツバツケをして下手に駆出すと「武智光秀暫く待て」と久吉の聲がかかる。踏止まつて向ふへ廻つて後向けの姿となり聲のかかつた方向へ首をひねつた石投げの見得。
 ×秀吉はもと織田信長の草履取であつた。その上顔が猿に似て居た。冠者は元服した若者からこゝではのゝしつて青二才位の意味。

眼下の村手をきつと見下し。詞和田の岬の左手より追々つゞく数多の兵船。間近く立つたる魚鱗の備へ。千生瓢の馬印は。疑ひもなき眞柴久吉。風をくらつて此家を逃げ延び。手勢引具し光秀を討取る術と覚えたりと。いふより早く。フシひらりと飛び下り。草履摺みの猿面冠者。いで一挫ぎと身繕ひ。勢ひ込んでかけ出せば。眞柴筑前守久吉対面せんと呼ばはつて。三衣に代る陣羽織。小手膺

×さん。僧の着る大衣、七條、五條、僧衣。先の坊主の衣とは打つて代つて陣羽織を

つけ

七〇 久吉（かしらアオチと、切目の検非違使、鬘櫛洗ひ）

以前の僧形とはうって變り朋黄金のてつぼう、同じ大口、

はいたて、赤地金の陣羽織を

着し、鍬形を打つた烏帽子を冠り、右脇を折つて前に構

へ、次の間の櫓を拂つて出る（この間退き）。

七一 光秀、見るより大膽に真中まで駈戻り「觀念せよ」と腰太刀に手をかけて詰寄る（ツケ）。

×僧が死人を冥途へ誘引指導する式からこゝでは首を打ちおとしてやる

七二 皷月身体を起して兩手を展げて二人の間を遮つてから久吉に向ひ。

×籠鳥にかけ、かごの鳥が自由の空を慕ふのを老母が子を慕ふにかけた。

×竹を切つて作つた竹やり、光秀があやまつて母を竹やりで突いたのも不思議な子をもつた因果が母に報いたのである。

當も優美の骨柄。悠然として立出づれば。地光

秀見るより仰天し。駈戻つてはつたと睨み。詞ヤ

ア珍らしい眞柴久吉。武智十兵衛光秀が。此世

の引導渡してくれん。觀念せよと。地詰寄る光秀

中を隔つる老鳥の。子故に手疵屈せぬ老女。な

う久吉様。詞我が子に代る此母も。天命遁れぬ引

つそぎ鐘。作りし罪の萬分一亡ぶる事もあらう

かと。思ひ余つた此最期。武智が母は逆磔に。

かゝつて無慙の死を遂げしと。末世の記録に残

×さかはずつけ。身体を逆にして柱にはりつける刑。

×死出の山と三途の川。あの世へ行くこと。

七三 畢月、十次郎一緒に合筆したまゝ息を引取る。光秀は下手に身をそむけて合筆。久吉も合筆する。操と初菊とは納戸へ入る。

×諍。心も行動も美しい。言葉も態度も心も立派な

×あへなきから。あへないとなきから。とをかける

×不倶戴天の敵とも云ふ。君父の敵とは同じ人間世界に生きぬ。

して給べ。地 それもやつぱり悴めが。可愛さ故の

罪亡し。詞 うるさの娑婆に残らんより。孫と一緒に

に死出三途。ハアわたしもお供致しまする。い七三

づれもさらば。おさらばと。地 未練残さぬ武士

の。花も実もある此世の別れ。フシ 今ぞ果なくな

りにけり。操の前も初菊も更に詞も出でばこそ。

あへなき骸^かを押動かし天にあこがれ地に伏して

歎く。心ぞいぢらしき。地色 哀れを餘所に眞柴久

吉。光秀に打向ひ。詞 俱に天を戴かぬ亡君の弔ひ

七四 久吉、云放つて正面となる。

×年貢、税金。

七五 光秀、床几にかけたまゝ、左片手で拜む。すぐ氣を取直し、「互ひの運は」と立上り、勇氣一杯のノリとなり、「洞が陣に陣所を構へ」で大きく六法を踏み「首を洗つて觀念せよ」と鋭く正面となる（ツケ）

×男山、八幡から南一里。山崎合戦の時、筒井順慶がこゝに陣取つて日和見をして形勢を観望し、優勢の秀吉の方についた。

七六 久吉、これを軽く笑ひで受けて烏帽子の紐を締直し作ら「たとへ頂羽が」とノリ。「詞は搖がぬ大磐石」で左手をひらいた見得（ツケ）

×高祖と戦つて後下の一戦に破れ其の愛妾虞美人と共に泣いて別れた。

力山を抜き氣は世を蓋ふ。時利あらず難逝かず……」

軍。今此所で討取つては義あつて勇を失ふ道理。

諸國の武士に久吉が軍功を知らさん爲。時

日を移さず山崎にて。勝負の雌雄を決すべし。

七四 がいかにいかに。チ、流石の久吉よくいうた

り。我も、^{これと}惟任將軍と勅許を請けし身の本懷。一

先づ都に立歸り京洛中の者どもへ。地子^{×ダシ}を赦す

七五 も母への追善。互の運は天王山。洞^{×ほら}が峠^{×とうげ}に陣所

を構へ。只一戦にかけ崩さん。首を洗つて觀念

せよ。ホ、^{七六}、、何さく。たとへ頂羽[×]が勇あ

×孫武と吳起。共に支那戰國時代の兵法家。

×めぐる小車と光秀戰死の小栗栖とをかけた。宇治の醍醐村。

七七 光秀弓張りの形に大きく兩手を突出してツケを激しく刻ませて、久吉に鋭く寄る。

七八 節は一旦緩調となり一抹の哀愁が漂ふ。久吉は屍体を出て下手へ、光秀はツギ足で屍体へ入る。

七九 初菊出て、髪を切り十次郎の死骸の上におく。光秀は軒場の夕顔の實を切り落し、母の死骸に向つて合掌、二人の死骸を共に納戸へ運ぶ。

×「だからめはかゝれとてしも烏羽玉の我が黒髪を撫ですやありけむ」(遍照) 烏羽玉は黒髪にかゝる枕詞。「かゝれとてしも烏羽玉の世のあじきなさ身一つに」(酒屋) このうら若さでむさんにも切れとは、

×極樂往生の種と云ふと夕顔をかける

りとも。我又孫吳が秘術をふるひ。地 千変萬化に

かけ悩まし。勝鬨^{からどき}上ぐるは瞬く内と久吉が。詞

は揺がぬ大磐石^{じやく}。忽ち廻り小栗栖^{おぐるす}の。土に哀れ

を残すとは知らず知られぬ敵味方。睨^{七七}み別るゝ

コハリ二人の勇者。ナホス^{七八}二世をかための別れの涙。

七九、× かゝれとてしも。タ、キカ、リ 烏羽玉の。其黒髪をあ

へなくも。切拂うたる尼が崎。菩提[×]の種と夕顔

の軒^{八〇}にきらめく千生瓢箪^{×せんなり}。駒の嘶^{いなな}き迎ひの軍卒

見渡す。沖^{八一}は中國より追ひ追ひ入來る數萬の兵

八〇、段切に近づいて節は一段と勇壯となり、遠寄せをかぶせる。久吉手をかざして下手を見やる。加藤正清（かしら有平糖の隈取りをした鬼若、髷前髪付の揉上げ）萌黄金のてつぼう。同じ大口に茶織の鎧、鉢巻、槍を持ち、千生瓢箪の馬印や幟を持つたツメ軍卒を引具して出る。

八一、光秀、久吉、正清の三人が同時に六法を踏む。殊に光秀はワクワリといふ手をつかふので荒物としての大きさが加はる。

×「瓢箪から駒が出る」の諺によりつづける。

八二、「仮名書にイ、イイ、イイ、……」と語られるところで、光秀、右の樗足、左の樗足で極り「末の」が桁頭で大きくゆつたりと立見得（ツケ）。久吉と正清とは下手斜に極つた形、ドン、ジャンの打込みをかぶせて幕となる。×この浮るりの題名はこゝから取られる。

（人形の型は大西重幸氏の「人形演出と解説」に依る）

船。威風凜々凜然たる。眞柴が武名仮名書に。

うつつ絵本の太功記と末の。世までも。ユリ三重残

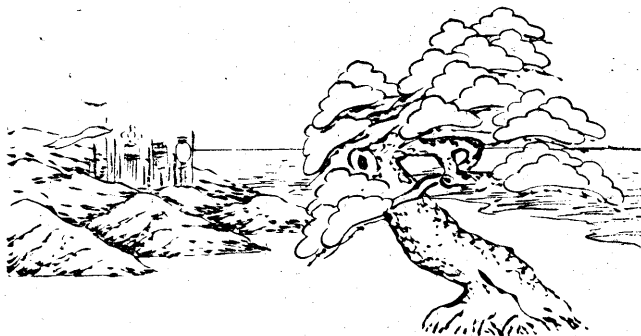
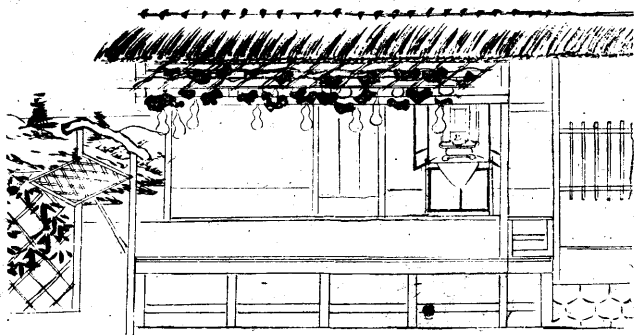
しけり。（本文の送仮名は歴史的仮名遣に訂正。）

外に	鬼	アオチと 源 ヨリ眼の 検非違使	アオチと 太	若男	文七	ネムリの 検非違使	娘	老けおやま	婆	カシラ (出場順に依る)
軍卒姓 つめめ 四四	加藤虎之介	眞柴久吉	〃	武智十次郎	武智光秀	眞柴久吉	初菊	妻、 操	母、さつき	役名
	〃	〃(奥)	〃(奥)	〃(前)	〃	〃(前)	〃	〃	厄ヶ崎	場名
	揉揚、前髪付	油付、櫛洗い、兜付	唐毛の捌き	油付、前髪付 煎茶釜	揉揚、髻油付 摺み立て	坊主、頭布付	油付、十能、花櫛 いたづら	油付、片はづし	白の切髪	髪
	動きの 三日月眉	ア動きの チの	ア動きの チの	描き眉	つ動きの 眉の	描き眉	描き眉	青眉	眉ナシ	眉
	白(隈取)	白	白	白	白又は薄卵	白	白	白	薄卵	塗カシ 色ラ

舞台装置

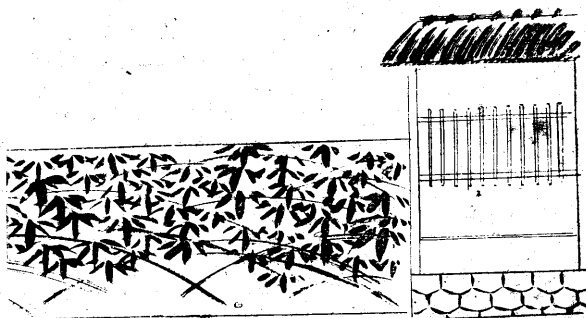
これは明治二十四年十一月竹本越路太夫（後の竹本攝津大掾）御靈文樂座上演の時の道具帳より複寫

「勝利いかにと庭さきの」まで



「すね木の松ヶ枝……」より段切まで

再取現在
このびる眞
上記の光も柴
の裏秀の垣
庭のの図……
道具の出版
帳にはより
から返す手
選び順の櫓
ました。先
の型「こ」
を現あります
わしまで対



第一期 刊行

▲印ハ既刊

第二期 刊行

▲帝坂觀音靈驗記	靈坂寺の段	心中天網島	河庄	蘆屋道滿大内鑑	其の葉子別れ	壇浦兜軍記	阿古屋琴黃
一谷礮軍記	陣屋	〃	紙屋内	近江源氏先陣館	盛綱陣屋	王澤前職袂	道春館
妹背山婦女庭訓	妹山、背山	新版歌祭文	野崎村	妹背山婦女庭訓	金殿	太平記忠臣講釋	喜内住家
伊賀越道中雙六	沼津	生寫朝顔話	宿屋	伊賀越道中雙六	岡崎	夏祭浪花鑑	長町裏
伊勢普頭戀腰劔	油屋	菅原傳授手習鑑	寺子屋	仮名手本忠臣藏	扇ヶ谷	花上野鬻碑	志渡寺
▲繪本太功記	尼ヶ崎	攝州合邦辻	合邦住家	紙子仕立兩面鑑	大文字屋	箱根靈驗雙仇討	阿彌陀寺
仮名手本忠臣藏	勘平切腹	近頃河原の達引	堀川猿蓑し	鎌倉三代記	三浦之助別れ	八陣守護城	正清本城
〃	山科	三十三所花の山	澤市内	義士銘々傳	彌作鎌腹	鷗山古跡松	雪黃
桂川連理柵	帯屋	艶容女舞衣	酒屋	源平布引瀧	九郎助住家	彦山權現警助劔	六助住家
加賀見山舊錦繪	長局	ひらかな盛衰記	逆櫓	曲輪燂	吉田屋	日吉丸稚櫻	小牧山城中
傾城阿波の囀戸	十郎兵衛内	双蝶々曲輪日記	引窓	奥州安達原	袖萩祭文	双蝶々曲輪日記	橋本
御所櫻堀川夜討	辨慶上使	本朝廿四孝	十種香	戀娘昔八丈	白木屋	櫻景清八島日記	日向島
戀女房染分手綱	重の井子別れ	伽羅先代萩	御殿	壽連理の松	湊町	冥途の飛脚	封印切
碁太平記白石噺	揚屋	名筆吃又平	將監閑居	櫻鐔銀餃朝	錢谷	菅原傳授手習鑑	道明寺
戀飛脚大和往來	新口村	義經千本櫻	壽し屋	卅三間堂續由來	平太郎住家	良辨松由來	二月堂

繪本太功記メモ

昭和二十七年一月五日印刷
昭和二十七年一月二十日發行

文樂叢書 第三編
繪本太功記尼ヶ崎
定價 五十円

編集

文樂愛好會

印刷者

大阪市東區高麗橋五丁目
株式會社 萬年社

發行人

石井常彦

發行所

大阪市四ッ橋文樂座內
文樂愛好會

電南(75)二〇八二・二〇九二番
振替口座大阪二一五二六二番

銘 酒

長界母



灘 · 御 影

興 亞 酒 造



車羽ソース

姉妹品 車羽ケチャップ